様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０１９

研究課題名（和文）発達障害等による困難を抱える子どもの主観世界と子ども理解の方法論の検討

研究課題名（英文）Examination of the methodology of the subjectivity world and the understanding of the child with the difficulty due to developmental disabilities

研究代表者
土岐　邦彦（Toki, Kunihiko）

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：５０１７２１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、発達障害等のある子どもたちの「生きづらさ」を明らかにする方法論に関し、事例研究と彼らの活動現場への参与観察で得た彼らの「語り」を通して考察した。事例研究では、対象児の様々な経験についてのライフヒストリーから得られた「語り」に基づきその一人称的な世界の再構成を試みた。さらに、活動現場への参与観察では、彼らが参加するいくつかの文化・スポーツ活動の特質をふまえ、活動の保障がいかに彼らの「自己の育ち」を促しているかを分析した。
　その結果、当事者から見える主観世界を照射し、特別支援教育に支配的な子どもの実態把握とは別種の子ども理解のあり方を提示することができた。

研究成果の概要（英文）： In this study, we considered about the methodology to clarify "difficulty of living" of children with developmental disabilities, through their "narratives" that we got by the case studies and the observing participation to their activity spot. In the case study, through the life history of the target children, we attempted to reconstruct their first person’s world based on "storytelling" about various experiences. In addition, through the observing participation in their activity spot, we analyzed how the guarantee of activities promotes their "growth of self" based on the characteristics of several cultural and sports activities they participate in.
　As a result, we were able to illuminate the subjective world seen by the children with developmental disabilities and present different ways of child understanding as opposed to grasping the actual situation of children who are dominant in special support education.

研究分野：臨床教育学

キーワード：発達障害　生きづらさ　主観世界　語り　子ども理解

1．研究開始当初の背景

発達障害等により困難を抱える子どもの特別支援教育において、近年、医学的・心理学的な障害特性論からの子どもへの接近を促進しつつ、行動分析学の影響を受けた「実態把握」が進行してきている。教育実践的には一人ひとりの子どもの思いやねがいを十分に考慮することなく、「目に見える変化」を子どもたちに追い求め、役立つとされる「スキル」や「態度」の獲得状況を評価の対象とするような傾向をひろげてもきた。

このような子ども理解とそれを基盤にした実践は、客観性・因果性を重視する半面、臨床・実践の現場でしばしば指摘される子どもたちの生活感情を縛る固有の主観世界（「自己嫌悪感」「不全感」等の感情）への洞察を軽視していると考えられる。そこで、本研究では、競争と自己責任を強調する新自由主義的な諸施策のもとで、子どもたちの生存や発達が深刻な状況にあるのではないかという問題意識に立ち、現代社会で生活する子どもたちの「生きづらさ」に心を寄せながら、「子どもをどのように理解するか」という課題にアプローチする。そのために、「発達障害等による困難を抱える子どもの主観世界」に接近する試みをすすめていくとともに、その際に必要となる「子ども理解の方法論」に関する検討もあわせて行っていくことにした。

2．研究の目的

（1）臨床教育学における子ども・若者（当事者）の「声」を聴き、その生存・発達の現実に接近するという方法意識に着目し、「生きることとその困難（障害）」を当事者の語りの中から探っていく。具体的には、対象者が参加する活動現場への参与観察と聴きとりにより、発達障害等による困難を強いられる子どもたちの「現実」に接近することを通して、当事者の「一人称的な世界」を明らかにする。

（2）教育学分野では質的な調査方法が未だ十分に確立されていない。そこで本研究では、臨床教育学が注目してきた「身体に基礎づけられた情動と感情の相互的な働き」「子どもの行動と意識（主観世界）との緊張的局面」「当事者と調査者との相互規定的な関係性」等の基本的視点を共有し、各調査対象のフィールドのもつ固有性とそれぞれのフィールドで行われてきた調査方法の独自性を尊重しながら、「生きづらさの現実」に接近するための質的調査方法の再検討を課題とする。

3．研究の方法

本研究は以下の 3 つから構成・展開された。

（1）資料の収集

本研究で資料の収集において採用した方法は、半構造化面接による聴きとり調査および参与観察である。本研究は、もともと独自に行ってきた２つのフィールドにおける研究経過の発展を期して計画されたものである。このうち、森博俊（研究分担者）は、特別支援学校高等部を卒業後の知的障害のある若者を対象に「障害をもちつつ生きてきた」ライフヒストリーの聴きとり調査を継続的に実施した。もう一方のフィールドで研究を行ってきた土岐邦彦（研究代表者）は、思春期・青年期を生きる発達障害児が参加する文化・スポーツ活動（演劇・吹奏楽・登山）の場で参与観察をするとともに、それらの活動に参加することの発達的意味について検討するために対象となる若者および保護者に聴きとり調査を行った。

（2）研究協力者との全体研究会

本研究の展開過程においては、必ずしも「発達障害等」の当事者を対象とした研究を行ってきたわけではない研究者に本研究の問題意識と方法意識を共有する立場から参加を求めた。各年度 4 回行われた「全体研究会」においては、上記（1）の研究報告に対して、それぞれの視点から有益な示唆を受けるとともに、とりわけ方法意識に関する各自の知見を提示する機会と役割を担ってもらった。

（3）招聘講師による講義と議論

同じく「全体研究会」では、他の専門領域の知見に学ぶために、ゲスト講師を招きそれぞれの専門領域（小児精神医学、発達心理学、障害者教育）から本研究の課題にかかわる講義をお願いし、発達障害等の理解に関する知見を学んだ。

4．研究成果

（1）森が行った研究においては、対象となった若者から、例えば「障害」について本人が感じ考えてきたこと、小学校以来の生活・学習における困難、仕事や家族関係への思い、人間関係の経験とそれに伴う感情などについて、聴きとり調査者との相互規定的な関係の中で深く考えられた「語り」が得られた。これらを通して、対象となった当事者の「一人称的世界」の構成を試みたところ、とりわけ、他者からの社会的評価によって「大人らしく生きる」ことを求められたことが、対象者の日常において一定の安定をつくりつつも、現実の社会生活の中では脆さを内包しているという意味での両義性を、対象者の「主観世界」の特徴として引き出すことができた。こうした主観的意識に注目することが、「生きづらさの現実」に接近するために重要であると確認された。

（2）土岐が行った研究においては、友達関係や親子関係に男女差のあることが見出されるとともに、彼らがいかに過去の自分（それも負の記憶）に束縛されているかが明らかになった。日常の場所（家庭や職場）とは異なる「第三の場所」での活動（演劇・吹奏楽・登山という活動）は、学習の場として組織された活動とは異なり、「余暇活動」として教育指導的なまなざしによる評価からは比較的自由であるはずであるが、彼らがそのようなまなざしを意識し続けていることから、青年期において「新たな自分」の体験と創造を保障する活動の重要性が示唆された。

（3）独自に進められた上記二つの研究は、「自己の育ち」を共通のキーワードとして、それぞれのフィールドでの活動と調査をさらに発展・深化させ、方法の精緻化とより洗練されたケース記述を行うことができた。とくに日常生活の情動・感情に揺れる障害当事者の現実の「語り」から、認知的枠組みによる「実態把握」だけではとらえきれない当事者の意識世界を提示できた。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 森博俊（2017）：当事者の「障碍と生」の経験と子ども理解－「養護学校」卒業生の聴きとり調査を通して－、査読有、『臨床教育学研究』第 5 巻、pp.96－115

② 土岐邦彦（2016）：文化・スポーツ活動へ

の参加とその発達的意味－障害のある若者たちの語りを通して－、査読無、『障害者問題研究』、44 巻 3 号、pp.178－185

③ 土岐邦彦（2014）：発達障害をもつ若者の「自己の育ち」をとらえる視点－友人関係の様態に関する諸事例を通して－、査読無、『岐阜大学地域科学部研究報告』、34 号、pp.151－165

④ 土岐邦彦（2014）：自閉症スペクトラムをもつ若者の友人関係の育ちを考える、査読無、『障害者問題研究』、42 巻 2 号、pp.119－124

〔学会発表〕（計６件）

① 土岐邦彦：発達障害のある子ども・若者理解の課題と方法意識について、日本臨床教育学会第 6 回研究大会（課題研究Ⅰ）、2016 年 9 月 24 日、立命館大学（京都市）

② 森博俊：「障碍と生」の経験と子ども理解－「養護学校」卒業生の聴きとり調査を通して－日本臨床教育学会第 6 回研究大会（実践・事例研究発表）、2016 年 9 月 25 日、立命館大学（京都市）

③ 土岐邦彦：障害のある若者たちにおける演劇活動の意味－対人関係の変化と「自己」のそだちに視点をあてて－、日本教育学会第74回研究大会（ラウンドテーブル）、2015 年 8 月 28 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）

④ 森博俊：当事者の「障碍と生」の経験と「自己」の問題－特別支援学校卒業生ゴロさんの聴きとりを通して－、日本教育学会第 74 回研究大会（ラウンドテーブル）、2015 年 8 月 28 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）

⑤ 土岐邦彦：演劇活動にとりくむ障害青年の他者との関係性の変化と「自己の育ち」、日本臨床教育学会第 4 回研究大会（課題研究Ⅰ）、2014 年 9 月 26 日、フォレスト仙台ビル（宮城県仙台市）

⑥ 森博俊：「障碍と生」の経験と自己の働き－時間を意識する「自己」の両義性、日本臨床教育学会第 4 回研究大会（自由研究発表）、2014 年 9 月 27 日、フォレスト仙台ビル（宮城県仙台市）

〔図書〕（計１件）

① 土岐邦彦（編著）（2015）：『劇団ドキドキわくわく　障害のある若者たちの発達と演劇活動』、第 4 章「演じて育つ－演劇活動が育む友情と若者たちの『自己の育ち』」、pp.41－59、群青社

6．研究組織

(1)研究代表者

土岐　邦彦（TOKI　Kunihiko）
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号：５０１７２１４

(2)研究分担者

森　博俊（MORI Hirotoshi）
都留文科大学・文学部・名誉教授
研究者番号：１０１４５７０８

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

田中　孝彦（TANAKA Takahiko）
武庫川女子大学・元教授
研究者番号：８００９２２６１

南出　吉祥（MINAMIDE Yoshinari）
岐阜大学・地域科学部・准教授
研究者番号：７０５９３２９２

堤　英俊（TSUTSUMI Hidetoshi）
都留文科大学・文学部・講師
研究者番号：６０７３４９３６

舩越　高樹（FUNAKOSHI Kojyu）
岐阜大学・教育推進学生支援機構・特任助教
研究者番号：４０７９２０１５